

## 囲碁あれこれ

大森 海太

初めて囲碁に接したのは新入社員で工場勤務のころ、隣の課長代理のオジサンから教えてもらった。その後丸の内に転勤した先の事業部長は囲碁大好き人間で、昼休みには応接室でみんなが碁を打っていた。

昭和49年8月のある昼休み、いつものように打っていると、突然遠くでドカンという音がして床が揺れた。地震かと思ったが実は隣接する重ビル爆破事件、囲碁のお蔭で危ないところに行くわさなくてラッキーだった。

それからいろんな人たちと碁を打って親交を深めたが、思い出に残るのは某氏の紹介で、当時よくテレビにも出演されていた日本棋院の小川誠子七段ともことの対局だ。六子置かせてもらつての指導碁だが、小川さんは素人を持ち上げるのがお上手で、局後の検討では、

「大森さん、とてもよく打てていました。ただこの一手が残念で、正しくこちらに打たれていたら、私わたくし投了しようかと思っていましたのよ」

もちろんそんなことはないのだけれど、こう言われて悪い気はしないものである。のちに三段の某女流棋士と打ったことがあるが、この人は容赦のない人で三十手も打たないうちに我が大石が憤死してジ・エンドとなつてしまった。

私見だが囲碁のプロとアマチュアの差はきわめて大きい。野球では甲子園で活躍した高校生が、翌年プロの球団で活躍することもあるが、囲碁ではそうはいかない。アマの高校者でもプロの初段には歯が立たないそうだ。

私はなんとなく三段くらいといわれているが、こんなのはゴルフの社内ハンディと同様、好い加減なものである。

会社をリタイアしたあとはアチコチからお誘いがあり、多いときは四つつくらの碁会に入れてもらつて、毎週のように打っていた。

現在では会社の同期とその友人たちの月二回の会のみで、終わったあとは軽くイッパイ。ペンクラブの前会長T氏も一時所属されていたし、元会長のS氏とは今も好敵手だ。

どのみち年寄り連中のへば碁だが、ボケ防止に少しは貢献するのではと思っている。